

復興対策としてのエゾアワビの種苗生産

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鴨志田, 正晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006918

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



復興対策としてのエゾアワビの種苗生産

(ウナギ種苗量産研究センター 量産実証グループ長：鴨志田 正晃)

福島県では、ヒラメやエゾアワビなどの栽培漁業が盛んに行われ、特にエゾアワビは年間 50 万個程度の稚貝が放流され、放流した種苗の約 10% 程度が水揚げされるなど県内のアワビ漁業を支えてきた。しかしながら、平成 23 年の東日本大震災により福島県の栽培漁業施設は壊滅し、放流用種苗を生産することができなくなった。

福島県の栽培漁業の再生に向け、平成 23 年度から水産庁の「被災海域における種苗放流支援事業」がスタートし、静岡県にある当所南伊豆庁舎では、福島県栽培漁業協会の職員と連携してエゾアワビの種苗生産、放流を行うことになった。

事業の開始当初は、アワビ類の感染症であるキセノハリオチス症が問題となっていた。その対策として、飼育水の殺菌に加え、飼育排水を通じて病原体が地先に流出することを防止するため、飼育排水殺菌システムを新たに設置して種苗生産を開始した。

福島県の海域に放流するため遺伝的多様性に配慮し、地元福島県の海域で漁獲された親貝から採卵、ふ化した幼生を南伊豆庁舎まで輸送して飼育を行った。

アワビ稚貝の初期の餌料には、コッコネイスという付着珪藻を用いた。少量を周年培養して元種とし、必要な時期にポリカーボネイト製の波板に付着させて大量培養した。しかしながら、南伊豆庁舎でアワビ類の種苗生産を実施するのは初めてであり、付着珪藻の培養が計画通りにいかず、餌不足に陥り稚貝が大量死することもあった。このため、付着珪藻の培養が不調の時には、針型珪藻という浮遊性も持つ種を小型容器で大量培養し、波板に付着させて餌とする飼育方法も試みている。稚貝の大きさが 5mm 程度に達すると市販のアワビ用配合飼料も食べることができるようになり、約 1 年間飼育することで放流に適した 30mm サイズまで成長する。

この事業の目標は、およそ 30mm のエゾアワビ稚貝を 3 ～ 5 万個福島県内に放流することであり、ほぼ目標は達成されている。放流時には福島県の漁業者も参加して潜水によりアワビを放流しており、福島県内でのエゾアワビ稚貝生産の再開に期待を寄せている。福島県の栽培漁業施設は再建中で、平成 30 年度内に竣工する見込みとなっている。それまでの間、南伊豆庁舎でエゾアワビの種苗生産、放流を継続し、福島県の栽培漁業の復興に貢献していきたい。



エゾアワビ種苗生産施設と生産に取り組む福島県栽培漁業協会職員



福島県いわき市地先へエゾアワビを放流



著者と生産したエゾアワビ種苗